

平成22年 5月15日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520031

研究課題名（和文） ロシアにおける人格的存在論の研究

研究課題名（英文） On russian personalistic ontology

研究代表者

大須賀 史和 (OSUKA FUMIKAZU)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：30302897

研究成果の概要（和文）：

本研究計画では、A.ローセフの言語論の分析を中心として、対象を人格的に捉える存在認識と表現の成立構造について考察した。我々にとっての対象とは「理解された対象」であり、これを産み出す対象の言語的な認識と表現は「理解の外化」と「外化された理解の認知」を自ずと伴う。これが存在の人格的把握の根源を形成するが、それは人間的な世界認識全体を規定することから単なる認識論に留まらず、多様な問題領域と連関することになる。

研究成果の概要（英文）：

In our research project we analyzed the philosophical theory of language, concerned with the epistemological structure of being, developed by A. Losev. Generally, objects for human being are “understood objects”; they are based on the objectification of our understanding and recognition in linguistic acts (recognition and expression of objects). This causes us to see things in the world as personified things, and prescribes a whole humanistic understanding of world. Therefore, this epistemological structure concerns itself with various philosophical and socio-cultural issues.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学

キーワード：人格、存在論、ロシア

1. 研究開始当初の背景

近代ロシア哲学の特徴として、従来から「存在論的な」関心があることが指摘されてきた

(ゼンコフスキー『ロシア哲学史』1948など)。だが、亡命哲学者によるロシア哲学史の素描では、それらは深く討究されずにとどまって

いた。また、ソ連の研究がマルクス＝レーニン主義哲学に特化していたことや、日米欧での研究の多くも革命思想史や社会思想史を中心としたため、十分な研究がなされないままであった。

このため、大須賀はこれまでの一連の研究を通じて、ロシアにおける存在論関心が社会哲学や宗教哲学、美学、言語哲学など極めて多様な領域にまたがるものであり、我々が日常的に存在と接する局面で、それを具体的に把握しようとする傾向であることを明らかにしてきた。これらの成果を踏まえてロシア哲学における存在論の問題をさらに深く検討する必要性があった。

2. 研究の目的

本研究計画では、A. ローセフ(1893-1988)が1920年代に提出した哲学的構想の中に「人格的存在論」と呼ぶべき傾向があることに着目し、その具体的な哲学的展開について検討することを目的とした。これはロシア語の表現として「*лицо*」を持つということが「*личность*」の根本的特徴だという発想を哲学的に展開したものと言うことができる。こうした存在の捉え方は、存在に対する主観の側からの恣意的な意義付けにすぎないと見ることもできるが、むしろこれを具体的な認識における不可欠の要素だと考えるところにロシア的な存在論のユニークな特徴があると言える。

ローセフの『神話の弁証法』(1930)では、「神話的存在」は、当該の神話的世界観の中で生きている「神話的主体」にとっては、完全に「現実」の一部をなしているという主張が見られる。これは、我々が「現実」として受け取る「世界」には一定のバイアスが含まれており、他の世界観を持つ者からすれば、そこには多分に「神話的なもの」が含まれているという相対主義に近い。

だが、ローセフは現実をありのままに捉えられない人間の認識能力の限界として神話的認識を批判するのではなく、むしろそうした限界を構成する構造そのものに目を向け、それが存在認識の本質だと考えたのである。その上で、ローセフは「神話的存在」は「人格」であるとし、我々の存在理解に人格的な傾向があることを指摘していたのである。

こうした点を踏まえ、ローセフの『名の哲学』(1927)における言語論が「人格的存在論」をどのように定礎したのか、その解明を本研究計画の具体的な目的とした。

3. 研究の方法

研究方法の設定にあたって考慮したのは、

『神話の弁証法』においてローセフが「表現」と「存在」とを同一視する独特な表現理論を提起していたことである。それによれば、「形象」と「意味」からなる「表現」は他のあらゆる存在と同等であると見なされる。なぜなら、一般に「存在」には必ず一定の「形象」があり、それを介して我々はそれが何であるかという「意味」を理解しているため、構成上「表現」と「理解された存在」は区別できないからである。とはいえ、「理解された存在」は認識する我々の側からの意義付けを多分に包含しているはずである。もちろん、純粹に主観を廃した無色透明な見地も決して不可能ではないかもしれないが、それは日常的な存在認知からはかけ離れてしまう。

こうして、ローセフの立場からすれば、我々にとって存在は基本的に「表現」＝「意味付けられた存在」として現れている。従って、表現理論の前段をなす言語論の構成について検討することで、彼の表現理論や神話理論を可能にした哲学的構想の基底部分を解明するというアプローチを取った。

その際には、ローセフの言語論に大きな影響を与えている東方キリスト教の神名論を彼がどのように受容したかという点も考慮し、「人格的存在論」の歴史的背景やその可能性についても検討することとした。

4. 研究成果

ローセフの言語論は、我々が具体的に言語を使用する局面において、言葉とそれが表示する「対象」の関係性に大きな関心を寄せている。言語が何らかの対象や事態を表示する場合、それらに対する一定の理解が言語的表現に内在化されているはずであり、対象はこの一定の理解に対応した「理解される存在」として定立される。

その場合、たとえ完全ではないにせよ、対象の本質と呼ぶものが反映されていると考えなければ、対象を理解したことにはならない。言い換えれば、言語使用の局面において言葉と対象は「理解」の水準では一致している。しかも、そうした言葉を用いて他者とのコミュニケーションを成立させているとすれば、そこでの「理解」は言語によって外化され、さらには他者と共有されていると言わなければならない。

こうして、「理解された対象」は、一定の意識化作用を客体化したものであるが、同時にそれがまさに「対象存在」として、意識から自立した存在として立ち現れてこなくてはならない。言い換えれば、意識を外化したものが対象として捉えられることによって、その対象が意識を持つ、すなわち端的に言えば「人格的存在」として捉えられる事態が想定されることになる。言わば、言語的表現の

成立構造そのものが、対象存在を「人格性」を持つものとして現出させていると言える。

このようなローセフの言語論においては、「認識された対象存在」を成立させる構造の分析において、フッサール現象学に見られるエイドスやアイデア概念などが独自のニュアンスを付与されつつ援用されている。だが、対象は単に静態的に直観されるだけでなく、意味を成立させる動的・弁証法的な契機をはらむものとして捉えられている。それによって、人格的存在に単なる主観的・恣意的な意味付与とその反照による「人格化」の契機ばかりでなく、動的な論理的必然性があることを論証しようとしていた。

例えば、「一」（単数性）と「多」（複数性）などの対立のカテゴリーや、その総合としての「統一性」という言語論理のカテゴリーは、対象の素朴な認識においても看取される。「机」はそれ自体が「一なるもの」であるが、多くの部品という「多性」を持つ統一体である。これは対象を言表する際にも失われることのない「矛盾」として保持されなくてはならない。こうした矛盾的对立を内包したのとして対象存在を捉えること自体が、対象認識の生成＝変化のダイナミズムを産み出す。なぜなら、対象が「外部化された理解」として客体的に定立される時、それらの言語論理的なカテゴリーとその矛盾的对立を内包した「存在」として立ち現れ、その意味を内部から動的に産出するかのように見えるからである。こうして常に生成変化し、自己を矛盾的に表出する人格的存在が成立する。それはあたかも対象存在が「知性」を持つかのように見せる契機ともなる。ローセフはこうした知性の成立構造に着目し、その論理的連関を示そうとしていたのである。

さらに、こうした対象との人格的關係性は単に対象の認識のみならず倫理的態度や美的態度のような問題領域へと広がるはずである。社会哲学や倫理を人格的な存在論の立場から基礎付ける構想があったことはローセフ自身もほのめかしており、人格的存在論は単に認識や言語表現の領域に留まらないと言える。今後の研究においては、こうした問題領域への取り組みが必要であることも確認できた。

以上が本研究計画の成果として明らかにしえた内容である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

① 大須賀史和、ローセフ『名の哲学』におけるシンボル＝エネルギー理論とその広がり、日本ロシア思想史学会『ロシア思想史

研究』、査読有、2010年6月刊行予定

② осука Фумикадзу, ”Объект и идеал-реализм в философии серебряного века”, Бюллетень

〔学会発表〕（計5件）

① 大須賀史和、ローセフ『名の哲学』におけるシンボル＝エネルギー理論とその広がり、日本ロシア思想史学会、2009年7月25日、早稲田大学

② осука Фумикадзу, ”Философия языка и этика в «Философии имени» Лосева”, Русская философия в горизонте современного мира, 2009年7月16日、ソフィア

（大須賀史和、ローセフ『名の哲学』における言語哲学と倫理、国際会議「現代世界におけるロシア哲学」、2009年7月16日、ソフィア）

③ осука Фумикадзу, ”Философия языка А. Ф. Лосева и современность”, L'œuvre d'Alekseï Losev dans le contexte de la culture européenne, 2008年9月26日、ボルドー

（大須賀史和、ローセフの言語哲学と現代」、国際会議「ヨーロッパ文化のコンテクストにおけるアレクセイ・ローセフの業績、2008年9月26日、ボルドー

④ 大須賀史和、認識＝存在論としてのエイドス論 —ローセフの現象学の位相との関連で、日本ロシア思想史学会、2008年3月28日、早稲田大学

⑤ осука Фумикадзу, ”Объект и идеал-реализм в философии серебряного века”, Античность и русская культура серебряного века, 2007年10月18日、モスクワ

（大須賀史和、銀の時代の哲学における客体とイデアル＝リアリズム、国際会議「古典古代と銀の時代のロシア文化」、2007年10月18日、モスクワ）

〔図書〕（計1件）

Е. Тахо=Годи, А. Тахо=Годи, Изд. Наука, Сборник «Вехи» в контексте русской культуры. 2007, 426С. осука Фумикадзу, ”Бердяев и «Вехи» – оппонент революции и/или реакционного славянофильства?” 100-107.

（Е. Тахо=Годи, А. Тахо=Годи編、ナウカ出版社、ロシア文化のコンテクストにおける論集『道標』、2007年、426ページ。大須賀史和執筆、ベルジャーエフと『道標』—革命の反対者、あるいは／そして反動的スラヴ主

義、100-107 ページ)

[その他]

ホームページ等

[http://www.losev-library.ru/index.php?
pid=4995](http://www.losev-library.ru/index.php?pid=4995)

資料集

報告集

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大須賀 史和 (OSUKA FUMIKAZU)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：30302897

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：